

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：32664

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720167

研究課題名(和文)漢魏晋南北朝隋唐に於ける『山海経』の受容を巡って - 神話と文学・政治・画像

研究課題名(英文)Reception of Shanhaijing in Han, Wei Jin Southern and Northern Dynasties and in the Sui and Tang Dynasties--- Myth and Literature, politics and Icons

研究代表者

松浦 史子(Matsuura, Fumiko)

二松學舎大學・文学部・講師

研究者番号：80570952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：中国最古の神話的地誌『山海経』が、動乱の漢末～魏晋南北朝を経て、隋唐という再びの統一帝国に至るまでの文学・政治に如何なる影響を与えたのかを、文献と画像の双方から総合的に考察した。検討の結果、例えば、中国西北部の神話・神仙的壁画に特に多く描画される有翼の白馬の画像について、それが『山海経』に所収の、西方から献納された神馬「吉量(吉良)」である可能性を、各種瑞祥志・史書などの文献資料の記述を併せて明らかにした。また、現地考古・文物局の研究員等の協力を得て、内蒙古和林格爾自治区・後漢墓(瑞祥図)の保存状態ヒアリング、および周辺調査を行った。

研究成果の概要(英文)：Based on both texts and images, we comprehensively investigated how the Shanhaijing, China's oldest mythological treatise on geography, affected literature and politics across massive upheaval during the Southern and Northern Dynasties and up to the period of the Sui and Tang Dynasties, when China once again became a unified empire. From the results of the investigation, for example, regarding the particularly large number of icons of a winged white horse in mythological, miracle-depicting wall paintings in Northwest part of China, the possibility was considered that they are representations of the JiLiang, the sacred horse described in the Shanhaijing. Additionally, the description of the JiLiang in documents, such as records of auspices and other historical documents, was clarified. In addition, we obtained the cooperation of researchers at the local bureau of antiquities and culture in Horinger County, Inner Mongolia, and conducted surveys on the late Han period tombs there.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：『山海経』 瑞祥と災異 神話と政治 漢魏晋南北朝隋唐 天地瑞祥志 和林格爾後漢画像墓 白馬朱鬣 神馬

1. 研究開始当初の背景

天下第一の奇書と称される『山海経』の研究は、当初の持つ博物書の正確から、地理歴史・思想・文学・美術・民俗民族学など多分野に亘り、すでに層の厚い研究が存在する。しかしこの書物が動乱の漢～南北朝時代の文学に於いて如何に受容されたのかを通史的に追う試みは稀少である。

通史的にみて『山海経』に基づく文学として著名なのは、郭璞『山海経図讚』と陶淵明「読『山海経』」という六朝文学である。報告者(松浦 2002~)はこのような六朝時代に『山海経』に深く関わった文学者として、従来の『山海経』受容史でも看過されてきた六朝末の詩人・江淹に着目し、従来空白状態であった六朝末の『山海経』受容の一形態を明らかにした。江淹が『山海経』最古の注釈者である六朝始めの東晋・郭璞の神仙の文学を継承することは既に高橋和巳(1967)や曹道衡(1984)によって指摘されるが、江淹と『山海経』の具体的関わりについては十分に研究されていない。これに対し報告者は、江淹が『山海経』と郭璞注の欠を補う為に、『赤泉経』という作品を手がけたという史伝に着目し、その『赤泉経』に比定される「逐古篇」という作品の検討を行った。その結果明らかになったのは、当該作品が、史書の边疆誌の情報等を以て『山海経』の奇異な世界の実在を証明せんとする郭璞『山海経』注の実証的精神を継承すること、郭璞『山海経』注に欠ける域外の情報、仏教的世界などを補填する学術的試みであったという事である【拙稿「江淹「逐古篇」について - 郭璞『山海経』注との関わりを中心に」2007.3】。

六朝始めの博物学者・郭璞は、『山海経』の最古の注釈者である。しかし、郭璞が『山海経』に基づき作成した『山海経図讚』(うち303編が現存)に関する専論は、国内外ともに僅少であり、さらに『山海経図讚』の一編一編を精読した研究は皆無である。これに対し報告者は、「水の霊府」という特異な語を読む『山海経図讚』「崑崙丘」を精読し、郭璞が「崑崙」を中心とする広大な水の宇宙観を構想していたことを明らかにした【拙稿「崑崙と水 - 郭璞『山海経図讚』「崑崙丘」にみる水の宇宙観」2006.3】。以上が、報告者による博士論文「六朝文学に於ける『山海経』の受容について - 」(2009 於東京大学、博士学位授与)の成果の一部である。

郭璞『山海経図讚』や陶淵明「読『山海経』」は『山海経』の“図像”に基づき作製されたものである。しかし、『山海経』の図像に関する本格的検討は、近年、神話学の大家である中国社会科学院文学研究所・元教授・馬昌儀氏によって始められた明以降の『山海経』図像研究に留まる(2000,2002,2006)。これに対し申請者は、主に、郭璞が眼にした『山海経』「古図」の原貌を探るため、日本学術振興会の特別研究員奨励費(DC2-PD)科学

研究費(若手B 2010-11)等を用いて、現地文物局の協力のもと、主に漢代に多く作製された石のレリーフ・画像石に彫刻される『山海経』の神話的図像の系統的調査を行っている。その調査成果を用い、博士論文提出後には、まず、後漢の政治・文化的中心地である中国河南省南陽から出土した後漢の画像石に多く描かれる「牛に似た有翼の独角獣」の「名称・性格」を巡り、それが『山海経』に初出の「一角の武獣・兕」が、その「一角」という異形ゆえ、漢の讖緯思想の影響下に「瑞獣」の要素を帯びつつあった姿であることを指摘した【拙稿「中国南陽の漢代画像石にみる独角獣について - 『山海経』の異獣「兕」のゆくえ」2010.10】。

さらに、日本のみならず現存する唐代の図像つきの瑞祥志『天地瑞祥志』(財団法人・前田育徳会・尊経閣文庫蔵)の研究をも進めており、これらの調査を通じては、例えば『天地瑞祥志』の「鳳」の項目の冒頭に伝えられる「凶事」を起こす「鳳凰に似た四鳥(發明、焦明、〔肅+鳥/霜+鳥〕、幽昌)」の存在に着目し、中国周辺部のみならず保存される瑞祥志【図】などの記述を総合し、本来「吉鳥」であった四鳥が「凶鳥」の要素を帯び、六朝～唐成立の「鳳」の項目の冒頭に描かれる程に重要な存在となった過程を明らかにした【拙稿「關於瑞祥志中可見的似鳳四凶鳥 - 以日本前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』引『楽斗図』為端」2011.3】。

以上の『山海経』の神話図像研究は、拙著『漢魏晋六朝に於ける『山海経』の受容とその展開』(汲古書院 2012.3/日本学術振興会・研究成果公開促進費 2011 年度・課題番号 235046)に大幅改訂を加え所収、公開した。

2. 研究の目的

申請者による従来の「漢魏六朝に於ける『山海経』受容研究」を基盤とし、その対象をさらに異民族王朝である北朝を経た隋唐に成立した図像と文献に拡張し、該期の『山海経』の受容について考察する。

(1) 郭璞『山海経図讚』についての検討。

当該作品については、魏晋南北朝時代の政治と密接に関わる「瑞祥」を中心に考察する。

後漢の王莽が瑞祥「白雉」の出現を掲げて天下を篡奪した事は知られるが、漢末から魏晋南北朝にかけて、短命の王朝の正統性を保証するための「異形」の瑞祥は急増した。こうした政治的背景の下、『山海経』の原始的な異獣・異物のうち、郭璞『山海経図讚』では瑞獣として示される異形の博物は少なくないが、その殆どが未検討のままである。(目下、『山海経図讚』の一編一編を精読する試みは申請者による研究に留まる。【松浦 2006、10】)。よって、本研究では、漢魏晋南北朝の瑞祥図に『山海経』由来の異獣・異物・神々が頻りに描かれること、瑞祥情報を載せる緯書・志怪書等が、郭璞『山海経』注釈に

多く引かれる点、などに着目し、『山海経図讚』の瑞祥観念について、「図像と文献」の双方から検討する。

(2) 漢魏晋南北朝時代の志怪書にみる『山海経』の記載の検討。

漢魏晋南北朝に多く編まれた怪異の記録書「志怪書」には、既に『山海経』からの影響が指摘される。しかし、志怪書の『山海経』的博物・異域に関する系統的研究はない。よって、本研究では、漢以降の志怪書のうち『山海経』を継承する博物記載を網羅的に洗い出し、その博物・異域の選択およびその受容形態のうちに、各志怪書とその作者の国家観・世界観を探る。

(3) 中国周辺部のみ現存する瑞祥志にみる『山海経』の記載の検討。

従来の『山海経』研究では、隋唐に於ける受容研究は殆どない。しかし、とくに中国周辺地域のみ現存する瑞祥志・敦煌・唐『瑞応図』(亀・龍・鳳のみ現存、一部除き未解読)や、日本・唐『天地瑞祥志』(最善本である前田尊経閣文庫本の二十巻のうち、一、七、十二、十三、十四、十六、十七、十八、十九、二十が現存。一、七、十二以外は、未翻刻の状況)には、『山海経』に関する記述も少なくない。よって、国内外初の試みとしてその記載整理を行い、動乱の時代に多く編纂された『瑞祥志』にみる『山海経』の受容状況を探る。

3. 研究の方法

「文献」と「図像」の相互照射による方法を探る。

近年、中国社会科学院の馬昌儀氏により、本格的な『山海経』図像研究が開始されたものの、その対象は明代以降の図像を中心とする。これに対して、六朝時代の郭璞や陶淵明が目にしたとされる『『山海経』古図』の原貌をさぐるための有効資料として馬昌儀氏も注目するのが、漢代に多く作製された石のレリーフ・画像石だが、既に厚い層のある漢画像石研究の成果は、必ずしも『山海経』研究に十分に反映されているとは言い難い。

このような状況を踏まえ、申請者はここ数年、郭璞『山海経図讚』の図像的側面を探るため、漢代画像石に刻まれる『山海経』に関連する図像の系統的調査を行ってきた。

本研究で新たに注目するのは、山東省武氏祠堂・後漢時代画像石を始め、漢魏晋の画像石・壁画にみる瑞祥図には、『山海経』の異獣や神格に関する経文が刻まれる作例が少なくない点である。この事は、『山海経』にみるいくつかの原始的な異獣や神格が、漢以降に興隆した讖緯思想の下、「瑞祥」として受容されていった可能性を示すだろう。このような推測に基づき、本研究では、申請者による従来の『山海経』図像に関する漢代画像石研究を継承しつつ、検討の対象を、さらに、漢魏晋南北朝の壁画にみる神話・神仙・瑞祥

図に拡張する。またこの一連の図像調査の成果は、漢以降の『山海経』に関する文献資料に合わせ、漢魏晋南北朝時代における『山海経』受容の実態について、総合的に把握してゆく。

平成24年度

文献調査：

まず、基礎的文献作業として、北朝異民族との接点に留意しつつ、『山海経』に基づく発の韻文文学・郭璞『山海経図讚』、漢魏晋南北朝時代の志怪書、唐代の瑞祥志の釈読・解析を行う。

(1) 郭璞『山海経図讚』にみる瑞祥観として特に注目するのは、「瑞馬」である。

郭璞には『山海経』原文には無い瑞祥観を持つ馬に関する『山海経図讚』が特に多く(水馬・天馬・馬・吉量等) いずれも「天」に属するものとして「龍」と同一視されるとともに、概ねが「西北に産出する瑞馬」だが、これらの『山海経図讚』については、未検討である。よって本研究では魏晋南北朝の文献に「朱鬣」の「白馬」に関する記述が少なくないこと、中国西北地域に見るあかい鬣の瑞馬「吉量(吉良)」の受容を探る。

(2) 漢以降、郭璞・陶淵明を経て江淹に至るまで、『山海経』が与えた影響は、韻文作品のほかに、博物書・地理書・志怪書・瑞祥志などに見ることができる。

とくに漢魏晋南北朝時代に成立した志怪書の筆法は、形態的特徴・生態などを誌す『山海経』のそれに一致し、『山海経』の異域・異物等を踏襲した博物的描写がなされる。こうした『山海経』の博物的描写の系譜にあるものとしては、漢・東方朔『神異経』、『十州記』、漢・郭憲『洞冥記』、魏・張華『博物志』、晋・郭璞『玄中記』など、「図像」に基づくものとしては、『外国図』、『括地図』などがあり、また前秦・王嘉『拾遺記』や北魏・酈道元『水経注』等の北朝の志怪的地理書も同じ『山海経』の系譜にあるとされているものの、従来の志怪書研究に於いては、これらに関する系統的研究はない。よって本研究では、志怪書に見る『山海経』の博物記載(異域・異物等)に的を絞り、『山海経』原文をそのまま引用する、或いは、換骨奪胎した博物、各書物に共通する、あるいは独自の博物等を割り出し、漢以降の『山海経』受容の実態を探る。

(3) 日本にのみ三つの抄本が現存する唐代の瑞祥志『天地瑞祥志』の佚文を解析。該書が今年、中国での京大・昭和抄本の出版を承け国外でも俄に注目を集める瑞祥志であり、未検討の『山海経』の佚文・異同も少なくない。さらにこの公刊を承けて、日本で緊急発足した前田尊経閣文庫・江戸抄本(最善本)の翻刻会(代表者・藤女子大学・水口幹記氏)には申請者も参与するため、本研究では、当該研究会での申請者の担当分(第18「禽」、第19「獸」所収の『山海経』佚文)の釈読成果を用いる。その際、漢魏晋～唐代

の文学・史書にみる瑞祥記述と比較検討する。

画像調査：

一連の基礎的文献作業と同時並行的に、平成22年度には、夏期・秋期の二度に分けて、申請者がこれまでの画像調査で培ってきた博物館・文物研究所などの人脈、および元東京大学東洋文化研究所教授・小川裕充氏（中国美術史）などの下で会得してきた図像学の知識を活かし、中国大陸でのフィールド画像調査を行う。

現在、中国に於ける考古遺物の保存状態は必ずしも良好とは言えず、場所によっては野外に設置・放置されたままの状況にあり、劣化のすすむものも少なくない。実際、これまでに申請者が、山東省済寧博物館、臨沂博物館、白集漢墓、茅村漢墓などで行ったことのある漢代画像石調査では、数百点に亘る貴重な漢代画像石が野外に放置されたまま、風化の加速する現状を目の当たりにした。このような状況下、漢魏晋時代の画像石・壁画の調査の主たる目的は、精密な画像の調査・記録作業となる。具体的方法としては、書き起こし図を用いた記録のほか、高感度・高画質のデジタルカメラの撮影による保存を行う。

まず平成24年度中には、「傍題付き」の画像墓として著名な内蒙古和林格爾後漢墓を対象とし、該墓の瑞祥図に、『山海経』の神格「雨師妾」が傍題・経文を伴い描かれる作例を調査。とくに『山海経』に初出の古来の雨神・軍神である雨師妾が、中国最古の仏陀図とともに描かれる点に注目し、異文化との関わりから中国北辺に於ける『山海経』受容について考察する。

これらの神話神仙・瑞祥画像調査の成果は、申請者による基礎的文献作業に併せ、解析を試みる。

平成25年度

文献調査：

昨年度までの調査の記録整理を続行させる。

画像調査：

平成25年度には、敦煌研究院・王旭東副院長の協力の下、敦煌佛爺廟湾魏晋墓にみる傍題付き「瑞魚」のほか、「飛魚」（神木大保当墓）「仙人飛魚」（張掖高台魏晋墓）に比定される有翼の魚の「名称・性格（吉凶）」について、『山海経』にみる黄河上流に棲息する瑞魚（飛魚）の記述との関わりを考察。

一連の研究成果は、各文化の師事を仰いだ後、論文化を進める。また本研究の総括として、漢魏晋南北朝隋唐における『山海経』受容の継承関係などを押さえつつ、**未曾有の大動乱期から数百年の安定的帝国時代**をきたした人々の、**域外に対する観念・国家観**について**通史的に整理**してゆく。

4. 研究成果

文献研究

（1）陝北・河西の漢魏晋十六国墓にみる瑞馬の研究

陝北・河西の漢魏晋十六国墓には有翼の「馬」の図像が多く描かれるが、これらの馬の名称・性格比定の文献的根拠は、通行の報告書・図録類でも殆ど示されない。よって該地に多い有翼かつ紋様のある（白）馬の図像のうち、とくに「天馬」に比定される「酒泉丁家閘五胡十六国墓・五号墓・北壁」の作例（『酒泉十六国墓壁画』1989）、同じく、「天馬」に比定される「神木大保当漢墓・墓門」の作例（『陝西神木大保当漢彩絵画像石』1997、『神木大保当・漢代城趾与墓葬考古報告』2001）が、『山海経』『海内北経』所載の「長寿をもたらす、神馬・吉量」に淵源する、漢以降の重要な瑞馬「白馬朱鬣」である可能性を探った。

まず、上記図像が作成された漢代には、神馬と言え、古の理想国家である周王朝に西方異族が献納した、乗れば長寿になるという神馬「吉量」が圧倒的に支持されており、その共通イメージとして「朱鬣に紋様のある身体」「白馬」という特徴があることを、『山海経』『逸周書』など各種古書類の記述に確認した。

続けて『山海経』等の「周王朝に西方の異族から献納された紋様のある白馬朱鬣の神馬・吉量」が、漢の緯書類に至り重要な瑞馬「白馬朱鬣」となった背景を検討した。その結果、古来、吉量が保持する神仙的要素ゆえ、漢以降、神仙説に基づく讖緯説の興隆の下に天意を反映する「瑞馬」として緯書に吸収されたこと、さらにその緯書を反映する漢代の墓葬瑞祥画像に於いては、死者の昇仙を手助けする瑞馬として描かれたものと判断した。

さらに漢以降の受容例としては、「遠方の異物・博物」が「瑞祥」としてカウントされ始める現象も手伝って、例えば魏晋以降の史書に於ける「白馬朱鬣」は、天意を示す古来の神話的「瑞祥」であるに止まらず、中国西北の地に実際に産出する特産物であるとの特徴が加わることを確認した。

以上の文献的考察を踏まえ、中国西北部の漢魏晋画像墓に描かれる有翼の馬の図像のうち、①陝北神木大保当漢墓・墓門門楣「天馬図」、および甘肅酒泉丁家閘五胡十六国墓・前室北壁「天馬図」を採り上げ、それらがいづれも「神仙的・西域的な異物（瑞祥）図」のうちに描かれる、紋様ある有翼の白馬として表象されることから、その淵源には「古に西方からもたらされた紋様ある白馬朱鬣の仙馬・吉量」のイメージあるものと推察した。それらが有翼に描かれるのは、漢以降の瑞祥が天意と関わる緯書説や昇仙を目指す神仙説と不可分であるためと見なす。

なお本論の結びとして、漢魏晋から南北朝時代に掛けて、とくに異文化衝突が激化した中国西北部において『山海経』の古来の神々・異物・博物が画題として描かれた背景については、北方異族との接触による、漢族の自国神話回帰現象のあることを推測した。

(なお、当該研究は科研費若手B(2011年度)および高梨学術奨励基金(2011年度)の助成成果を部分的に併せたものである。)

(2) 前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』引、鳳凰に似る凶鳥「發明、焦明、鸛鷖、幽昌」の国際的研究の紹介

「駒場に迎える文学・芸術歴史 - 東大から前田尊経閣文庫まで」(二松学舎大学文学部国文科編『東京文学散歩』2014.3)において、前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』引の、鳳凰に似る四羽の凶鳥(發明、焦明、鸛鷖、幽昌)を巡る国際的研究の紹介を行った。

本書では、前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』を巡る国内の研究史の紹介を行うとともに、2012年11月に東京大学東洋文化研究所で発表された復旦大学文史研究所の孫英剛副教授による、当該研究の継承・発展研究を中心に紹介した。

(なお孫氏に拠れば、台湾の研究者の紹介により、報告者(松浦)による当該研究〔2009年度台湾神話国際学会にて発表、2011年3月論文発表〕を知ったという。)

画像研究・フィールド調査

(1) 中国内モンゴル自治区和林格爾・後漢時代・画像石墓にみる瑞祥図の現地フィールド調査。

(2012年8月28日~31日)

(画像の現地調査にあたっては、中国側の研究協力者として、陝西省考古研究院・王煒林所長、内蒙古自治区考古文物研究所・陳永志所長、和林格爾市所管の盛樂博物館所長等の多大なる助力を得た。また一連の調査は、福田素子〔聖学院大学・青山学院大学・関東学院大学非常勤講師・中国文学〕、山崎藍〔明星大学人文学部准教授・中国文学〕とともに行った。)

後漢時代に於ける『山海経』受容の一側面を探る試みとして、中国内モンゴル自治区和林格爾後漢墓の瑞祥図調査を行った。調査にあたっては、以前に陝北調査の際にお世話になった陝西省考古研究院・王煒林所長の紹介を経て、内モンゴル自治区考古研究所所長・陳永志氏に事前連絡をしていたものの、当日、院内の急な人事案件が発生したとのことで、陳院長の代わりに張研究員がアテンドしてくれた。日本側より、各メンバーの紹介とともにメンバーの論文・著書等を贈呈。

張氏に調査目的を伝えたところ、和林格爾後漢墓は、長年、劣悪な保存状態にあったため剥落などが酷く、大幅な改修作業が予定されているため、全面封鎖し見学不能とのこと。

大分粘ったが、現段階では人が入れる状況ではなく、我々一行に当研究所の陳院長を紹介してくれた陝西省考古研究院・王煒林院長氏が昨年、当墓を訪れた際も見学不可であったとの説明からやむなく現物調査を断念。予定を変更し、和林格爾市所轄の盛樂博物館に展示・公開される和林格爾後漢墓壁画の模造(原本の二倍の大きさ)の調査に向かうことに。内蒙古考古文物研究所より盛樂博物館所長に連絡をとってもらい、格爾市所管の盛樂博物館に移動。

正午少し過ぎに現地に到着し博物館所長に挨拶を済ます。学芸員のアテンド付きで、和林格爾後漢墓の図版調査。その結果、当該博物館展示の「瑞祥の傍題」の名称が、七十年代公刊の各種報告書に輯録されるものと大幅に異なって描かれていること判明した。その事を博物館学芸員に指摘すると、近年、現地の瑞祥図の剥落が酷く、傍題・図像の判読が不可能なものも多いため、このような齟齬が生じたのだらうという。早急な現地調査が求められるだらう。

博物館での調査を終えた後、市内で昼食をとり、和林格爾市郊外の新店子に保存されるという後漢墓の調査に向かう。黄土続く非舗装の道をひたすら走り、午後三時半、現地に到着。現地漢墓を主管する考古研究員・李氏によるアテンドで後漢墓の周辺調査を行う。確かに墓室に入る門付近は雑草に覆われ、人が入れる状況ではなかった。李氏による誘導で、後漢墓を側面・上面から調査。李氏に由れば、修復には数年間の時間を必要とするという。

(2) 台湾・政治大学教員訪問、漢魏晋南北朝隋唐に於ける道教文学・宗教・図像に関する国際学術交流。

(2014年2月18日~21日。)

(現地では、台湾政治大学の林桂如氏の協力のもと、同大学元教授・李豊楙氏、台湾中央研究院文哲研究所・劉苑如氏を訪問。)

近年の業績を交換するとともに、中国大陸・台湾・日本の道教文学・宗教・図像研究の今後の課題等について議論した。李豊楙氏の豊富なフィールドワーク経験を拝聴する貴重な機会となった。

(同行者は、聖学院大学・青山学院大学・関東学院大学・非常勤講師、福田素子氏である。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件、その他1件)

松浦史子「中国陝北・河西の漢魏晋十六国墓にみる瑞祥図の研究 - 『山海経』の瑞馬・瑞魚を中心に (Images Produced for

Han,Wei,Jin and Sixteen Kingdome
Tombs in Shanbei and Hexi Areas of
China- How They are Related to
Auspicious Hourse and Fish Illustrated in
Shanhaijing」
(高梨学術奨励基金年報 2012,11,pp283-290)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

松浦史子「駒場に迎える文学・芸術・歴史～東
大から前田尊経閣文庫まで」
(二松学舎大学文学部国文学科共著『東京文
学散歩』新展社 2014.3,pp84-90)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

6 . 研究組織

(1)研究代表者
松浦 史子 (MATSUURA FUMIKO)
二松学舎大学・文学部・講師(常勤)
研究者番号:80570952